



読売歌壇



小池 光選

新聞の歌壇に時折名を見付け「おお、戦友」と呼びたき一人 坂戸市 納谷香代子

【評】読売歌壇に関する歌がたびたび投稿される。この歌もその一首。「おお、戦友」がおもしろい。知らない人だけど、しばしば共感する歌が載る。まるで百年の知己のように。吉宗が象を飼っていたという浜離宮にて妻とテイタイム 守谷市 久保田洋二

【評】八代將軍徳川吉宗に一頭の象が献上されたことがあった。その象が飼われていた浜離宮で、いま妻とお茶を楽しむ。とつても夫婦仲良しに感じられるところがよい。稚拙ながら眺めるみたいにしてスツ着た若人光る四月一日 宇土市 三浦 清美

【評】晴れて社会人となった若者。ぴかぴかのスーツ姿に眺める稚拙を連想する。いかにそんな感じ。がんばってください。白鳥が一羽悠々泳いでる松本城の天守仰いで 狭山市 川上 鷹夫

古希ちかき老いを忘れむ菜の花の盛りに生れし三人目の孫 新座市 早川 泰弘
急停車よろける我をわづかみ助けてくれし見知らぬ青年 茅ヶ崎市 山内とみ子

目の手術して眠れねば思ふかな政宗、ジャック、丹下左膳を 宇都宮市 武藤さちこ
汽車を待つ数分間に詠む短歌線路に咲いた花を眺めて 鳴門市 楠井 花乃

「南無三」と念じて湯船に身を投ず源泉かけ流し四十五度の湯 角田市 豊岡 浩一
少しづつ空は白みて夜が明けるすべての人にそっとやさしく 東京都 熊倉 徹

栗木 京子選

母のこと「オーイ」と呼ぶな名を呼べと彼氏のできた娘の小言 島根県 重親 映人

【評】交際の相手と父親をつい比べてしまう娘。もし自分が「オーイ」と呼ばれたら嫌だ、と気付いたのだ。一方、作者のほうは小言をもらってどこか楽しそうに見える。花見会ブービー賞の賞品はちよっと嬉しき一人用鍋 新居浜市 寺村 洋子

【評】花見をしながらゲームなどで盛り上がったのだろうか。下から二番目のブービー賞をもらった作者。花見という集団行動に対して賞品は一人用の鍋。その対比が面白い。雑巾を絞っては広げ床を拭く春の日差しはの明るむ厨 八台市 内沢 秀一

【評】北国に住む方々にとって春の兆しはとりわけ嬉しく感じられるに違いない。「絞っては広げ」の丁寧なしぐさが印象深い。紅梅のつもりで育てし盆栽に今年ひとつの白き花付く 仙台市 千葉 幸平

満月とネオンが照らす水柱から光の粒が一滴落ちる 山形市 柏屋 敏秋
雷の夜の明ければ暖かい霧広がって春が始まる 市原市 岩政 健司

奥大和の顔もおぼろな微笑ふゆうべさびしく小ぬか雨ふる 東大阪市 池中 健一
植木鉢底を返せば養分を吸い尽くしたる根がとぐる巻く 船橋市 小山 民子

酒蒸しの蛤は花のごと開き今宵めでたき孫の初節句 和歌山市 溝口 圭子
ウィルスを恐れ洗へば調理師の指のあかぎれ深くなりけり 水俣市 角田 聖子

俵 万智選

僕だけの星座を辿る指先がスマホのロック画面をひらく 東京都 かなもん

【評】画面に並んだ数字を、暗証番号通りに辿る指先。毎回のことなので、動きもなめらかだ。その様子を捉えた上の句の比喩が美しい。「スマホ」という種明かしを後半にもつてきた語順が「星座」を生かしている。本当を装う嘘の多き世にエイプリルフールの嘘っぽい嘘 東京都 武藤 義哉

【評】確かに、エイプリルフールの嘘は、嘘とバレてこそそこにある。いかにもな嘘を楽しむながらの世相批判が、効いている。さよならは組体操の五段目の膝に小石がくい込む痛み 宇部市 常田 瑛子

【評】心の痛みだが、抽象的な表現ではないところがいい。まことに具体的な痛みを持ってきたところに、実感がこもる。手を伸ばすように拡大する空にピクトグラムみたいな飛行機 北海道 まつのせいじ

白鳥らと語らひにつつ別れたり今宵は少し酒が飲みたし 鹿嶋市 加津年根夫
海底の地層のように深くある検索履歴に光る君の名 東京都 吉村 花緒

わたしだけ潜水服を着てあるく四月の底のひかりの中を 春日井市 月夜の雨
銭湯とチョコサンドとの値が同じどちら選ぶか迷わぬわたし 神戸市 安川 修司
クレイン車のつばきたたみてあるあした視界せばめて黄砂降りくる 市原市 井原 茂明

花見より戻るホームの車中にてヘルパーは見えずや母が手を振る 太田市 木戸 健房

黒瀬 珂瀾選

歌づくりを始めて知りし風の名に東風吹きたれば春のたのしき 松本市 武井 絢彩

【評】新しい言葉を知るたびに、世界を見る目が一新され、さらに細部を発見できる。短歌に親しむことや創作の喜びが伸びやかに表現され、歌詠みとして深く共感しました。バスタブに耳をいくども洗いたり今朝の噂の透きとおるまで 徳島県 永田 愛

【評】聞きたくもない誰かのゴシップを聞かされる。これも人の世の習い事です。耳の穢れを清めるように、自分の心から噂話の記憶を追い出そうとする。そんな一日の終わり。泣き止めど見ればまた泣きさうになる燃ゆるものなき鎮火後の瓦礫 大船渡市 桃心地

【評】この春は各地で山火事による甚大な被害が発生しました。この歌は岩手県大船渡市の現場の景でしょう。復興を願います。蛇越池に水のあらんや山火事は真夜を盛りて古刹に迫る 西条市 山本美知子

現し世の母が最後に見えくらホームの庭のさくら見にゆく 稲城市 山口 佳紀
倒れぬよう幾度もたしかめ八尺の脚立に桃の花摘みをする 山梨市 田村由利子

コンビニのホットコーヒーお手軽で一人の車内に鏡を脱ぎぬ 富山市 正源 孝志
王子さまの助け待つらし閉ざされたシャッター街にぼつり牝猫 佐野市 中野 忠
毎日がフェイクニュースに漬かりてだれも笑わぬエイプリル fool 宇部市 小林千恵子
好きだって思いたかった胸の底が果てしなくスデレンレスの手ざわり 所沢市 須藤ゆかり